

理解と和解の旅

- タイ・スタディーツアーに参加して -

辻 宏

カンチャナブリは、第二次世界大戦中、日本軍が戦略輸送路としてタイからビルマへ抜ける 415km に亘って建設した泰緬鉄道（Death Railway）の基幹となった場所である。炎熱の土地、奥深い密林や絶壁の難所の工事に、連合軍捕虜（英、蘭、豪、米）3 万人、アジア系強制労働者（印、中、マレー、ビルマ、インドネシア、シンガポール、タイ、日本）20 万人を使役し、その間、熱帯の疫病、栄養不良、疲労などの原因で前者 1 万 6 千人、後者 10 万人を死に至らせた。当初日本の技術者が 5 年を要すと予測した工事は 1942 年 9 月に始まり、諸々の熱帯の悪条件の中を 16 ヶ月の突貫工事で 1943 年 12 月に完成したものである。

訪ねた戦死者共同墓地には 6 千 8 百人が埋葬されており、墓標からは、多く 21 才とか 23 才とかの極めて若い兵士と見てとれた。またカンチャナブリ戦争博物館には、これら捕虜たちの宿舎が展示されており、それは草葺屋根竹造りで、一人に与えられたスペースは幅僅か 75cm であった。捕虜たちが許されて描いた彼等の生活のスケッチから、捕虜たちは皆ふんどし一枚のみ着用、皮膚の傷の痒さを我慢できず川に浸して魚につつかせている姿などといった悲惨な様子がうかがえた。博物館を出たところには、“Forgive but not Forget”とあった。

クワイ川に架けられた橋は、日本軍の戦略的輸送網の拠点であったために、連合軍の爆撃の格好の標的となって激しい戦場となったところである。

我々は更なる体験を求めて、この泰緬鉄道にしばらく乗車することとした。今は農地となって密林の面影の感じられない地域を過ぎ、やがて列車は、汽笛を鳴らしつつ、歩くような速度でゆっくりゆっくり、ヘルファイア峠の Arrow Hill (Arahill) 栈橋を進んだ。難工事を極め、多数の犠牲者を出した、絶壁に架けられた木橋造りの栈橋で、今は穏やかな川の流れに沿った美しい景色の中に納まっている（写真）。



渓谷に沿って、絶壁に張り付く様に架けられた栈橋と鉄路の土台に、幾千もの犠牲者の霊が宿っていることを想った。わたり終わったところで列車を降りた。そして、今次の戦争でこの土地に日本軍が印した歴史を振り返り、当時を思い起こしつつ、わたって来た栈橋と線路をしばし歩いて戻ってみた。

カンチャナブリは、訪れるたびに、胸の突かれる、悲しいところである。

13-15 世紀に栄えた古都チェンマイを中心とするタイの北部一帯を PAYAP と称するが、その地方名を冠した PAYAP 大学の神学部は、19 世紀中頃に訪れたプレスビテリアンの米国宣教師により種が蒔かれた。プロテスタント系キリスト教がタイに伝えられたのは 1828 年、日本よりさかのぼること 50 年である。我々のメンバーの代表が挨拶の中で、日本が第二次世界大戦の折にタイの国に対してかけた迷惑について遺憾の意を述べたことに対し、司会の教授が、非常な評価を示された。

タイの山岳地帯に昔から住んでいる民族(ヒル・トライブ)の中で、カレン族はミャンマーからタイの広域に渡る最大の民族であり、タイ国内に 30 万人いるといわれる。カレン族の村々には、早くから欧米の宣教師が入り、また日本バプテスト同盟の宣教師の働きもあって、30%近く(50%とも言われる)のキリスト教徒がおり、我々がお世話になりホームステイした村では 52 家族中の 45 家族がキリスト教徒であった(写真はカレン族の民家)。



日の沈む少し前に村に着き、カレンの食事をいただいた後、夕拝が始まった。青年たちの奏でる音楽を合図に村人たちが大勢集まってきた。会堂から溢れる参会者を前に、ギドー牧師の説教は、60 年前の思い出から始まった。

「その当時日本軍の行軍がこのカレンの村を蹂躪し通過して行った。ギドー牧師たちは子供心にずっと日本を憎んできた。それから 60 年後の今日、2 度目の日本人のグループが村にやってきた。長い時間を経たあと、同じ信仰を持つ皆様と、今こうして出会えたことを感謝します。『隣人を自分のように愛しなさい、そして心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、あなたの神である主を愛しなさい(マタイ 22:37-39)』。隣人の罪を許せば、あなたの罪も許される。今日のこの日を限りに、憎しみを取り払って共にキリストにある交わりの中を歩もうではないか」と。

広い地域にわたって行われた太平洋戦争の期間、夫々の地でどのような出来事があったか、つぶさには知られていないが、東南アジアのこの地では、まさにギドー牧師のような印象を持ち続けてきている人々がいる。かつて訪れたオーストラリアやイギリスで、日本が戦争によって与えた傷痕を持つ人から、あきらかな不快を示された経験がある。

スタディーツアーの第一歩が、こうした理解と和解から始まり、非常に意義深いものであった。

(日本基督教団西東京教区タイスタディーツアーに参加して)